

聖書: ヨシュア記 15 章

説教題: ユダ族の相続地

日 時: 2010 年 8 月 1 日

ヨシュア記第 15 章。マタイの福音書冒頭のイエス・キリストの系図もそうですが、これだけカタカナの名前が続くと、私たちはそこはスキップして、もう少し意味のありそうなところに目を移したくなります。しかしある学者はこう言っています。そのようにすることによって、その人はヨシュア記の中心的メッセージを見逃すことになる、と。確かにヨシュア記はついに約束の地がイスラエルに与えられた！という成就の書です。その待ち望んだ成就がここに記されているのに、そこを読み飛ばすというのはおかしいことです。最も大事なところに来たのに、突然関心がなくなるなら、何のために今まで読んで来たのか、ということになってしまいます。ですから私たちも忍耐をもって、目を留めて行きたいと思います。

今日の 15 章は 4 つの部分に分けることができます。まず最初はユダ族の相続地の境界線についてです。他の部族よりも先にまずユダ族のことが記されるのはなぜでしょうか。それは彼らが先にくじを引いたからであったかもしれませんが、彼らユダ族の重要さがここに暗示されている、ということもあるでしょう。ユダはヤコブの 12 人の息子の内、4 番目の息子でした。彼の上にはルベン、シメオン、レビの 3 人の兄たちがいました。しかし一番目のルベンは、口に出すのも恥ずかしい罪を犯したことがありました。父ヤコブのそばめ、ビルハと寝たことです。それゆえに彼は長男としての第一の座席を失ってしまいます。ヤコブは創世記 49 章の遺言の中で、ルベンについてこう言いました。「ルベンよ。あなたはわが長子。わが力、わが力の初めの実。すぐれた威厳とすぐれた力のある者。だが、水のように奔放なので、もはや、あなたは他をしのぐことがない。」

次のシメオンとレビの二人も、父に大きなショックを与える罪を犯したことがありました。妹のダイナがヒビ人のシェケムという男に辱められたことに怒り、その町の住民に復讐したことです。彼らはその町の男たちに割礼を要求し、彼らの傷が痛んでいる頃を見計らって、全滅させました。ヤコブはこの二人について、同じく創世記 49 章の遺言の中で「シメオンとレビとは兄弟。彼らの剣は暴虐の道具。」と言い、「のろわれよ。彼らの激しい怒りと、彼らのはなはだしい憤りとは。」と語りました。

こうして 4 番目のユダが主に特別に祝福される器として取り分けられました。ヤコブの遺言の中で彼について語られていることは勝利、リーダーシップ、繁栄と良いことばかりです。ルベンから取り上げられた長子の権利はヨセフに行きましたが、後にユダの部族からは支配者、王が出ると宣言されました。創世記 49 章 10 節：「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。」そして事実、ユダ族から後にダビデ王が誕生し、ソロモンが誕生し、やがてまことの王イエス・キリストが誕生します。このようなユダ族の優位性が暗示される仕方で、彼らが土地の割り当ての最初に来ているのでしょう。

その相続地の境界線について 12 節まで記されています。まず南の境界線については 1~4 節です。塩の海、すなわち死海の南端からエジプト川に出て、海、すなわち地中海まで。東の境界線については 5 節の前半。これは塩の海、すなわち死海の沿岸そのものですから簡単です。北の境界線については 5 節後半から。ヨルダン川が死海に注ぐ入江から始まり、少々複雑です。11 節まで記されて、最後は海、すなわち地中海に至ります。西の境界線も簡単です。12 節にある通り、地中海の沿岸そのもの

です。

第2の区分は13～19節です。ここにはユダ族の代表であるカレブについてのエピソードが記されています。すでに彼については前の14章で見ました。彼は85歳になっていたのに、45年前と同じく今も私は壮健です！と語り、アナク人の町へブロンを攻め取ることを願い出ました。そしてそれを本当に成し遂げたことの記録がここに記されています。カレブは14節にある通り、ヘブロンからアナクの3人の息子、シェシャイ、アヒマン、タルマイを追い払います。一人でも恐ろしいはずの怪物を3人もまとめてやっつけたのです。前の章の12節でカレブは「主が私とともにいてくだされば、私は彼らを追い払うことができますよ。」と言いましたが、カレブの素晴らしい点はただ目の前の状況を見るのではなく、主を計算に入れてその状況を見つめ直したことです。人間的にはとても不可能に思えても、主の約束があり、主がともにいてくださるなら、奇しい導きは現れ得ると告白して進んだことです。その結果、85歳の彼が本当にアナクの子孫を追い払った！これぞイスラエルの模範です。また私たちが様々な課題に取り組む際の模範でもあります。

カレブはさらにヘブロンからデビルへ攻め上ります。その際、彼はデビルの町、すなわち「キルヤテ・セフェル」を打って、これを取る者には、私の娘アクサを妻として与えよう。」と言います。軍隊の将軍が、このように報償をぶら下げて、ある町を攻略する戦士を募るとするのは古代オリエントでは良く見られた習慣のようです。後にダビデもエルサレムを攻め取る際、「だれでも真っ先にエブス人を打つ者をかしらとし、つかさとしよう。」と言って戦士を募ります。これに対してカレブの兄弟オテニエルが名乗りを上げます。彼は次の士師記において、イスラエルの最初のさばきつかさとなる人です。その彼が見事にデビルを攻め取ります。これはカレブの信仰が良い意味で彼に伝染したということではないでしょうか。その模範にならったオテニエルは祝福を手に入れます。カレブの娘アクサを妻として得たことに加えて、18～19節にあるように、畑と、その畑を生かすための上の泉と下の泉を手に入れたのです。

今日の章の第3番目の部分は20～62節です。先ほどはユダ族の相続地の境界線が記されましたが、こちらではその中の町々がリストされています。向こうの地理に慣れ親しんでいない私たちにとっては、いよいよきつところです。解説書によると、このリストは11の地区に整理して述べられているようです。聖書地図を広げて一つ一つの町を確かめて行くなら、きっと新しい発見があることでしょう。しかし今日の説教ではそこまでのことは致しません。カルヴァンもこのヨシュア記15章の注解の冒頭で、細かい町場所一つ一つについて描写したり、その町の名前について論じたりはしない、と言っています。一つには自分自身、地形学や地方図に精通していないからではあるが、もう一つには多くの労をもってそのことをしても読者にはほとんど益をもたらすことがなく、疲労と困惑をもたらすだけだろうから、と言っています。カルヴァンがそう言っていると知りますと、私もここで無理をして一つ一つの町について説明をして、皆さんと一緒に恐ろしい時間を過ごさなくても良いのだ！とチョット安心します。しかしこの細かな町リストを見て、次のことを心に留めたいと思います。それは神のみわざは現実のこの世界の歴史の中で行なわれたということです。キリスト教は単なる頭の中の宗教ではありません。ともすると私たちにはそのようにキリスト教信仰を単なる心の問題、考え方の問題として押し込めてしまう。しかしここに、神のみわざは実際のこの世界の中で成就したということがはっきり示されています。神は私たちが今生きているこの世界の時間と空間の中で働かれ、このようにみわざをなされるお方である。私たちはキリスト教信仰の霊的な性格を強調するあまり、

信仰とこの世界は別物であるかのように考えてはならないのです。神の約束は確かにやがての天の御国で究極的に成就するのですが、神は向こう側にしかおられないのではなく、私たちが今生きているこの世にもおられます。そしてその神の働きは私たちの目が見ているこの世界にも現れて来るものです。そのことを覚えて、私たちが自分の信仰を今一度整えられたい。私たちの信じている神は、私たちが生きているこの世界で働いておられる神です。私たちはその神のみわざを今ここで経験させられつつ、そのことを通して一層天の御国の祝福に向かって行くような、そういう正しい信仰生活へ導かれて行きたいと思うのです。

最後4つ目の区分として63節に残念なコメントがあります。63節:「ユダ族は、エルサレムの住民エブス人を追い払うことができなかった。それで、エブス人はユダ族とともにエルサレムに住んでいた。今日もそうである。」今日の章の第1区分では主の大いなる祝福としてのユダ族の相続地の境界線が記されました。第二の区分ではユダ族の代表カレブの勇氣ある戦いぶり、また彼に触発されたオテニエルの立派な働きが記されました。第3の区分では現実の中で主が与えて下さった町々のリストが記されました。こういう話の流れを心に留めるなら、63節のユダ族がエルサレムに住むエブス人を追い払えなかったというのは、決して仕方なかったこととして見ることはできません。主の恵みは十分にそこにあったはずですが、しかしユダ族はその主に信頼し、従うことにおいて不徹底だった。

イスラエルは前々から、主が指定された先住民は生かしておいてはならないと言われて来ました。エブス人についても申命記7章2節で「あなたの神、主は、彼らをあなたに渡して、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。」と言われました。また民数記33章55節でも「もしその地の住民をあなたがたの前から追い払わなければ、あなたがたが残しておく者たちは、あなたがたの目のとげとなり、わき腹のいぼらとなり、彼らはあなたがたの住むその土地であなたがたを悩ますようになる。」と警告されていました。おそらくカナンの地の大部分の支配を手に入れ、また自分たちの割り当て地も得て、もうここまで来れば大丈夫だろう、このぐらいいいでしょう！と妥協したのでしょう。そうしたからと言ってすぐには何の問題も起こりません。しかしこのような不徹底さのゆえに、イスラエルはやがて祝福を失うのです。それは次の士師記にはっきり現れて来ることです。

この63節のコメントは読む私たちに警告を与えるものでしょう。私たちが困難や試練の中では必死に主に信頼します。主に祈り、御言葉に従い、霊的な戦いの只中にあることを覚えて身を締めつけて歩みます。しかし困難が一段落し、状況が落ち着いて来ると、主の御言葉を重んじなくなり、自分勝手にこれくらいはいいだろうと御言葉の原則に妥協する生活を許容する。しかしそこに大変な落とし穴があります。63節もあるこの15章でこれはたった1節の記述ですが、この小さな妥協から気づかない内に祝福は失われて行く、ということをこの書き方は暗示しています。

私たちはこれを読んで、何でもないような普通の生活も霊的な戦いの只中にあることを覚えたいと思います。もう一度63節を見て下さい。「それで、エブス人はユダ族とともにエルサレムに住んでいた。」とありますが、「ともに住んでいた」という言葉は、一見平和的なようで実は大変恐ろしい可能性を秘めている言葉です。私たちの生活にも、それと同じように神の御心と相容れないものが仲良く同居・共存しているということはないでしょうか。もしそういう生活が自分にあることを思うなら、今日の章は新たな悔い改めをもって再出発すべきことを私たちに促しています。主が召している信仰生活は、適当なところまでは主に導いてもらうものの、後は主に従うことをやめ、自分勝手な生活を楽

しんで、やがてその祝福を失って行く生活ではありません。そうではなく御言葉に従うところにある益々豊かな祝福にあずかる生活です。私たちが模範とすべきはカレブの姿であり、また彼と同じ道を歩んだオテニエルの姿です。主に信頼し、主に従うなら、私たちも彼らのようにさらなる祝福の生活へと進んで行くことができる。その正しい道へと、今日の章を通して立ち返らされて、主が備えている祝福の全部を受け取り、それを存分に味わわせて頂く真の幸いな歩みへ進みたいと思います。